

オスプレイ配備に反対する陳情趣旨

2019(令和元)年8月1日

陳情人代表 渡邊美代子

私は、十勝飛行場発着地より約400mの大空団地に住んでいます。

発着地まぢかに住む一主婦として、又、日常的に子供に接している保育士として、オスプレイが来るといふ知らせに大きな不安と懸念を感じている事を述べさせていただきます。

オスプレイの発着場となるといわれている帯広駐屯地は、資料の地図にあるように、南の森、大空団地、自由が丘、南町、稲田町などの住宅地のど真ん中にあります。

そして、十勝飛行場の隣、わずか100mに、205名もの子どもたちが通う帯広の森幼稚園があるのをご存じでしょうか？

すぐ近くには市民や少年たちが練習に励む野球場やサッカー場・市民球場・運動公園もあります。

さらに付近には、命の木クリニック・光南病院・北斗病院などの医療施設や、老健施設のかけはしや普仁園（ふじんえん）があります。

また、有数の文教地域でもあり、南町保育園・稲田保育所・若葉幼稚園・つくし幼稚園・第1・第2ひまわり幼稚園や、大空小学校・稲田小学校・豊成小学校・若葉小学校・大空中学校・南町中学校・第8中学校・白樺学園高校・南商業高校・緑陽高校・農業高校・工業高校・帯広北高校・コア専門学校・看護学校・帯広畜産大学などが集まっています。

3キロ圏内には、市内の約4割の子どもたちが通園・通学しているといわれています。教育施設の責任者やPTAの方々にも不安は広がり、通学路の安全を心配する小学校の校長先生もおられます。

帯広市長は、平成30年8月28日、北海道防衛局長あてに、「帯広駐屯地を使用する日米共同訓練に関する要望書」を提出し、「オスプレイの安全性に対する市民の不安が払拭

されている状況とは言い難く、駐屯地が市街地に隣接している本市としては、訓練における航空機の運用に関し安全の確保等に懸念をもっております。」と伝え、今年4月の説明を受けた際にも「市街地に近い帯広駐屯地を離発着拠点とすることについて懸念があり、積極的に受け入れる状況にはない」と同様の考えを伝えたと聞いています。私たちは、現時点においても、オスプレイの安全性に対する市民の不安は払拭されておらず、むしろ高まっていると感じています。

私の保育士の経験から、子供たちは環境の変化にとっても敏感です。

いつもクラスにいない実習生が入るだけで、子供たちは落ち着かなくなったり泣き出したり、しがみついて不安感を体全体で表現します。火事の避難訓練でびっくりしてしまったり、1～2日、外に出るのを怖がった1歳児さえいます。

そのような乳幼児たちが、オスプレイが頭上を飛びかう爆音や低周波頭の影響によって、窓がビリビリと鳴り、戸がカタカタしたり、おなかに響く重低音を感じたら、どれほど不安に思うでしょう。

不安感が増し、夜泣きが増えていったら、親としても安心して預けられなくなるのではないのでしょうか？

また、オスプレイと共に訓練に参加するCH53というヘリコプターは、2017年12月に、続けて2回、部品を落下させる事故を起こしています。

宜野湾市の緑が丘保育園では、ぶ厚い屋根がへこみました。真下は1歳児の部屋で、すぐ横の園庭では2、3歳児が遊んでいたといます。

その6日後には、普天間第2小学校の運動場に窓枠を落下させました。

60人もの子供たちが体育の授業中で、わずか13mのところ、重さ7.7Kgで90cm四方のアルミ製窓枠が落下し、その際に飛び跳ねた石が小学4年生の男子に当たっています。又、2018年2月には、落下していた13キロもあるオスプレイの部品が沖縄伊計島で発

見されています。米軍は部品が落下したことを把握していましたが、日本政府に通報義務があるのに、通報しませんでした。

米軍はこの事故の後の「学校や保育園の上を飛ばないでほしい」というお母さんたちのせめてもの願いにもこたえようとしていません。

帯広のお母さんたちが「子供たちはどこに逃げたらいいの?」と、不安を持つのは当たり前ではないでしょうか。

お母さん達は「もしオスプレイが飛んで来ることになったら、子供たちはどこに避難させてくれるのでしょうか? 避難訓練はどうするのか? 沖縄のように監視員を置いて避難させてくれるのでしょうか?」と、切実な声を上げています。

今でさえ、南町中学校に通う子のお母さんは「ヘリコプターの音で、授業中に黒板が震えたり、先生の声が聞こえない時がある。ましてオスプレイが来たらどうなるのでしょうか」と、心配しています。

発着場近くのNさんは、脳こうそくの後遺症のリハビリのために毎日散歩をしていますが、頭上近くを飛ぶヘリコプターに怖さを感じて、散歩を取りやめることもあるそうです。また、一人暮らしのお年寄りからは、オスプレイの事故が起こったら逃げることができるのだろうかという心配の声がたくさん上がっています。

オスプレイが配備されてから、沖縄では、騒音や低周波などの影響と思われる牛の死産や早産が生じていると報じられています。

伊江島の酪農家は、オスプレイが配備された「2013年4月以降で、分娩した30頭のうち5頭が死産し10頭が早産した。30年以上酪農を続けているがこれほどの割合で早産するのは初めて。死産は例がない。」と述べています。また、オスプレイの「ヘリパッド近くの養鶏場でも産卵が少なくなり、早産で商品にならない。」との報道もありました。

畜産農家の多い十勝としては、大きな問題ではないでしょうか。

更にオスプレイの放射性物質も心配されます。おとし、沖縄の安部（あぶ）の海岸にオスプレイが墜落した時、米軍が白い放射能・防護服を着て作業をしていた姿は、皆さんの記憶に新しいことと思います。

CH53にはストロンチウムが、オスプレイにはトリチウムと劣化ウランが搭載されていると言われていました。もし事故があったら、被爆してしまうかもしれません。

十勝飛行場のすぐそばには、帯広給食センターや浄水場があります。

上富良野演習場との往来で日高山脈を越える途中で事故が起これば、十勝川の源流が放射能に汚染される危険も起こります。

そして全国に安心・安全な食品を届ける十勝の農畜産業「フードバレー十勝」のブランドが大きな痛手を受け、観光にも風評被害を招きかねません。

日米地位協定によって国内法の制約を受けない為に、日米共同訓練では、「どのルートで・どのように・いつ飛ぶか」という飛行計画や訓練内容は、米軍から自治体や住民に殆ど知らされないと言われていています。計画が出るのを待っていては間に合いません。

2000年頃、帯広飛行場に米軍機が再三飛んできた時に、帯広市として「飛んでくるな」と米軍にその度にはっきりと要請し、それ以来、帯広空港には来なくなったという歴史があります。一方で、旭川空港には今も米軍機の飛来が当たり前になっています。

帯広市民は、その時の帯広市の断固とした態度によって、今までずっと守られてきました。

子どもたちがオスプレイの危険と隣り合わせで生活し続けることにならないように、市民のいのちと安全を守る議員として、市議会として、今できることをしてほしいと思います。市議会として「帯広駐屯地をオスプレイの拠点として使うな」と明言してほしいと思います。

この陳情に続いて7月29日には50名の市民が第2次陳情書を提出し、陳情者は103

名となりました。

住民の会は、地元（大空・南の森）での集会でオスプレイの事を知ってもらいつなかりを広げています。

また、オスプレイの上映会や、緑ヶ丘保育園のお母さんたちのDVDのおうち上映会、「オスプレイこないで」という歌を作り、「子どもたちの未来に平和を」の願いをこめた約250人の笑顔とメッセージの写真展を開くなど、様々な工夫をこらしてしてオスプレイについて市民みんなで考えようという取り組みを進めています。

そして、『オスプレイから子どもを守る会～十勝～』のママ・パパたちは、想いを共有する人たちと共に市内の保育所・幼稚園を始め色々な所に呼びかけて集めた、8,438筆の署名を、この16日に帯広市長と市議会議長あてに提出しました。

7月27日現在で、署名数は8,583筆に上っています。

このたくさんの人たちの不安な思いを受けて、是非、議会で取り上げていただきたくお願いして、趣旨説明を終わります。

なお、合計6点の資料を配布しましたのでご覧ください。ありがとうございました。

普天間 低周波も響く

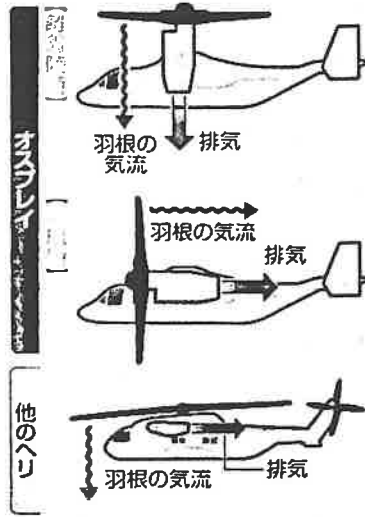
12年配備後、被害訴え続々

オスプレイが2012年から配備されている沖縄県宮野市の米軍普天間飛行場周辺では、目まいや耳鳴りなどの健康被害を訴える人が相次いでいる。県や専門家は、低周波音による人体や環境への影響を、国が調査することを求めている。(大平樹)

めまいや頭痛

「低い音が砂中も響き抜けてくる」。普天間飛行場の南西約一キロに住む田村静江さん(68)は、オスプレイ配備後、目まいや頭痛に悩まされている。
二〇〇七年に自宅を改修してカラオケ店を始めた。防音してあるが、オスプレイ独特の低い騒音には役に立たなかった。客が歌っている最中も聞こえるから、商売にならない。地域経済の落ち込みもあり、七年続けた店を今年三月に閉めざるを得なかった。

オスプレイと他のヘリの違い



牛が死産、早産

飛行場周辺の住民約三千人が加わる第二次普天間騒音訴訟団の高橋年男事務局長(63)は「オスプレイの低周波音は、体全体を震わせるような感じ。他の航空機の騒音とは違つ」と話す。事務局には、補聴器の不調や耳鳴り、目まいなどを訴える声が増えている。
オスプレイの旋回訓練やパラシュート降下訓練などが行われている沖縄本島北西の伊江島の小橋川産保さん(55)の牛舎では、原因不明の死産や早産が相次ぐ。小橋川さんの牛舎は米軍伊江島飛行場から道路を隔ててすぐ南側にある。一三年四月以降に分娩した三千頭のうち、五頭が死産し、十頭が早産した。一三十年以上酪農を続けているが、これほどの割合で早産するのは初めて。死産は例がないう。オスプレイが真上を旋回する際は、牛舎で牛の世話をする小橋川さんも低音で気分が悪くなる。
琉球大工学部の渡嘉敷健准教授(58)は音響工学、環境騒音学が今年五月、普天間飛行場周辺で米軍機が出す低周波音の音量を測定したところ、同じ輸送ヘリのCH53が七〇分だったのに対し、オスプレイは九九分に達した。
「人が感じるうるささとしては八倍くらいになる」と渡嘉敷准教授は「基地の中央で離着陸すれば周回への低周波音は少なくなるが、米軍が考慮している様子は見られない」と話す。昨年七月、沖縄県は国に調査を要望。今年三月に小野寺五典防衛相も会見で有識者会議の設置などの対応を明らかにしたが、具体的な解決への道筋は不明だ。
低周波音公害に詳しい笠原一浩弁護士(57)は「福井県敦賀市」は「風車や給湯器による低周波音の健康被害は各地で訴訟になっているが、個人差があつて因果関係を立証するのが難しい。基地周辺で医師を交えた調査が必要だ」と話している。

低周波音 100ヘルツは1秒当たりの振動数を表す単位)以下の周波数の音を指し、人の耳で聞こえない20ヘルツ以下は超低周波音と呼ばれる。不快感や圧迫感を与える

るとされるが、規制する環境基準はない。障害物を突き抜けやすい特徴がある。風力発電の風車から出る低周波音被害を訴える人が増えており、環境省は基準の設定を検討している。